

エッセネとゼーロータイ

杉田六一（古代オリエント研究者）

1、はじめに

① エッセネ派

ユダヤ史上、マカベア（ハスモン朝シリア）時代からヘロデ王時代、それから紀元 70 年ユダヤ滅亡の頃までパレスチナにエッセネと呼ばれる特異な宗教団体があった。エッセネの研究は、これまでに文献史料によっては殆んど研究し尽くされたといつてよいであろう。それは、資料の全部がヨセフスの『ユダヤ戦記』および『ユダヤ古代記』の中の記述と、フィロンの記述（紀元 20 年頃）に依っているからである。

エッセネについての記事は、エッセネ研究には価値が無いといわれている。1947 年クムランで、いわゆる「死海文書」が発見されて、長い間忘却の彼方におかれていたエッセネ研究が一躍脚光を浴びるに至った。禁慾的脱世間の平和主義的集団であった。持たぬもの、そして持ったものは、その持つ財を全部教団に贈って無産者となり、勤労し、私有財産共有を遵守し、集団の構成員となって、死海近くに教団生活を営んでいたのであった。

② ゼーロータイ（熱心党）

この宗教団体の組成された同時代に、ゼーロータイと称した熱狂的な一団があった。ヘロデ王が歿した直後、ガリラヤ人ユダがガリラヤでローマに反旗を翻えし、セポリス（イエスがヨセフとマリヤとともに暮らしていた地名）で王の武器庫や倉庫を掠奪しセポリスを焼い

た。この革命集団が増強するのをみてローマ軍は、これらの反抗者を捕え、処刑したり追い払った。ローマ打倒の意慾を燃やして、ユダヤ法厳守を第一義として異教を征服し、神裁政治の実現を期していたこれらの人々の熱狂振りは、異常なものがあつたのでカナイムまたゼーロータイと呼ばれた。自らゼーロータイとあたかも一教派であるかのように自称したのは、ユダヤ戦争の火蓋を切ってからであつた。サドカイ、パリサイ、エッセネに次ぐ第4の教派として、ヨセフスはこの烏合の衆のような一団を、エッセネと同じくその著述の中に挙げたのであつた。メシア出現新エルサレムの顕現を幻に描き、反ローマの衝動に駆られた民衆は、多数この集団に加わつたのであつて、パリサイ派の中からも加わつたものもいた。大体は、この時代に希望を失つた無産大衆が、この集団の構成分子であつた。メシアが出現してエルサレムが世界の首府となり、ローマに集つた世界の富は、エルサレムに移り、ユダヤ人の全体が幸福となり、不幸は世界から消えると信じ、メシア出現を促進するためには先ず、ローマと戦ふことであると決意したのであつた。

ユダヤでは時代を同じくして、平和穏和主義のエッセネと、他方に対照的な戦闘的急進主義のゼーロータイが現われた。紀元70年のエルサレムの落城、マサダ要塞陥落、キュレネのユダヤ人反乱、時代が少し降って[バルコクバの反乱](#)があつて、ゼーロータイは全滅した。

2、エッセネとゼーロータイの思想と行動

ここにエッセネについて語り、次いで、ゼーロータイを述べ、そして、両極端にあるゼーロータイとエッセネが何故に時代を同じくして現われ、遂にユダヤ人はその拠る国を失ひ、離散し、世界の流浪の民となつたかを考えてみたい。なおその行動と思想の本源にあつたメシア思想の一端を語つて本論考を結びたいと思う。

① エッセネ派の思想と行動

エッセネは、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』の中に、「財産の共有は、プラトンの想像力を楽しましたが、厳格なエッセネ宗派の間に、ある程度存在した」ということを挙げている。かつて、英のディクインジーは、エッセネについてのヨセフスの記述を読み「偽りだ。作為の偽りだ。実に悪意の偽りだ。」と書いてエッセネの存在を疑った。**エッセネの教義は秘密であったので、エッセネ教団に入団したもののほか、知るよしもなかったからと思われる。**

ヨセフス自身にしても、短い期間しか教団の中にいなかったのも、その奥義を体得するには至らなかったと思われる。況して、フィロンは死海に近い[エンゲディ](#)には行っていないので、その誌したことは聞き書きであった。エッセネの真相を把握することは難しい。クムラン文書の中の「**義の教師**」がもしエッセネであったとすれば、エッセネ教義に触れることになるが、未だ仮説としてであって、断言はできない。

当時幾多のエッセネと思われるような教団が存在していたようであって、ガスターも『死海文書』の中の教団の生活、その規律教理は、ヨセフスやフィロンの誌したことと、甚だ類似しているといっている。また、デュポンゾンメル教授は死海に近いアイン・フェシュカで1947年発見された「新契約」教団はエッセネと断じている。エッセネはヨセフスに依ればパリサイ、サドカイに次ぐ第3のユダヤ宗派であるが、パリサイもサドカイも政治的宗教団体であったが、**エッセネは政治とは交渉を持たなかった。**

エッセネは聖書にも、ラビ文学にも記されていないので「ヘブライ史の謎」といわれている。エッセネは紀元前2世紀前よりは古くないと考えられている。ヨセフスの『ユダヤ古代記』に、マカビアのヨナタン（紀元前161年～144年）の記事中に初めてその名が挙げられている。エッセネは、[パリサイ派](#)のハシディム（[敬虔派](#)）の分派といわ

れる。その時代は、政治が社会苦救済の力のないのを知り、政治から離れて荒野に隠遁して新組織を作ったのであった。ヨセフスやフィロンの時代には4,000人もこの教団に属しており、パレスチナ内の村落や、時に都会地にも散在していたという。

エッセネの名称の起源も定かではない。シリア語の「敬虔」という意味があるという説もある。ヨセフスの『ユダヤ古代記』に「Essa」という地名が出ているが、エッセネの名の起源と附会するむきもある。いずれにしても、他からこの教団に与えた名称であって、この名称に関しては25以上の異説があるという。エッセネから派生して、キリスト教と混合したエビオン宗派という派があったが、紀元220年にはローマに伝道したといわれる。肉食を禁じ洗礼を行い、星占術もその教義に織込み、主としてヨルダン河東方面に行われ、7世紀にイスラームに合するまで続いたという。このエビオン宗派の他、ペラのユダヤ人キリスト教会エレカイト派、サンプシアス派などの中にエッセネの教義が生きていたとも考えられる。

エッセネは、**動物の犠牲を献げない**で、彼らは「**敬虔な心こそ真実の犠牲である**」と確信していた。これらの人々は大体村落に住んでいたが、都会住居者の中に根を下ろしている罪惡に染まるのを免れるために都市を避けた。彼らは都会人との交際は、その心霊に丁度悪疫性の雰囲気によって疫病が感染するように、恐ろしい感化が及んでくるのを知っていた。彼らの或るものは農業に従い、また他のものは平和に役立つ手工業に従って自他を利した。金銀を蓄積することなく、まして、利潤を獲得するために宏大な土地を手に入れるというようなことはなかった。しかし、生活上当然必要な品は用意した。熟慮を重ねた挙句の行動として無一文となり一片の土地も持っていないで、全人類の中に殆んど唯一人で立っているが素晴らしく富んでいると考えていた。何故といえ、彼らは満足感を持っていた。**節約こそは事実**そうであるが、正に溢れる程の富であると判断していたからである。

投げ矢、投げ槍、短剣、兜、胸当、盾についていえば、これらの製作者は一人も見出せない。なお、また、武器兵器を作り、また戦争に関係する仕事に精を出すものも見出せなかった。たとえ平和的なものでも、容易に悪用される恐れのあるものの製作者は見出せなかった。卸にしても、小売にしても、貿易にしても、およそ商行為を営むなどという考えを持ったものはなかった。貧慾の誘いとなる、として斥けたのである。彼らの中には、一人の奴隷もいなかった。皆自由であって、相互に奉仕し合っていた。彼らは奴隷所有者を非難したが、奴隷制は人類平等の法を犯す不正、自然法を無効にする不敬と考えたためである。自然は母の如く、全ての人を同じように産み、育くみ、純粋な兄弟として創造した。決して名目ばかりではなく、全く真実からである。しかるに、この親類関係は悪性の貧慾の勝利によって混乱した。この貧慾が、親近感の代わりに疎遠を、友誼の代わりに敵意をもたらしたのである。彼らは、哲学は徳を積むに当って不必要とし、その論理の方はおしゃべりの議論家に、物質界の方は人性の把握できないものとして空想論者に委せたが、神の存在と、宇宙の創造を哲学的に論ずる部門だけは保留した。倫理の方は彼らは非常に熱心に勉強し、彼らの祖先の律法を規準と考えていた。これは、天来の靈感なくしては、心に依っただけでは感得できないものとした。常日頃この律法は教えられたが、特に、第7日に教えられた。この日は神聖な日として、全ての仕事を休んで、彼らがシナゴグと呼ぶ聖なる場所に集合した。シナゴグ内に列をなして、老幼各々序を守り、聴聞に都合のよいように坐を占めた。それから、一人は聖經を取り声を挙げて読む。そして、聖經に非常に詳しい者が出て、章句中の意味の難かしいものを解釈した。哲理研究の大体は譬喩の方法で説明したのであった。彼らは敬虔、神聖、正義、家をまた町を治める方法、真に善なるもの、悪なるもの、無関心なるもの、選択せねばならないものをどういう風にして選ぶか、選んではならないものをどういう風にして避けるか、要するに彼らの定めた規準としてこれら3、即ち神を愛し、徳を愛し、人を愛することを教えられた。彼らの神を愛することは多くの実証即ち誓言をなさないことで、正直さで、そして神こそ全ての善の少しも悪のない

本源であることを信ずることで表現された。彼らの徳を愛することはその金銭、世俗の地位また快樂に心を煩わされないこと、自制心、忍耐、その上儉約、簡単生活、満足、憐憫の情、律法厳守、不動の信念、これらに類する素養で表われた。彼らの心を愛することはその慈悲心、平等観、そして、僅かの語でもあれば何んとか適用されるが語では表わせない友情中に表わされた。

即ち、第1にその「住居」であるが、全ての人に共用されない住居は無いという観念から自分自身所有の住居を持たなかった。その上彼らは共同の生活をしたので、彼らと信仰を同じくするものには、何処からの訪問者にも住居は開放されていた。第2に彼らは「一つの出納所を持ち共同の[支弁](#)」をした。その衣類は共同に保管され、その食糧は共同食という制度で運営された。如何なる他の共同体でもここ以上に共同生活の行われたのを見たことがない。全く予期通り完全のものである。彼らが1日働いて得たものは私有財としないで共同資産に納められた。かくして得られたこの利得はこれを用いたいと望むものに分けられた。病人は何も提供することができないからといって粗略にされない。既に共同資産の中に病者の看護費は入っていたからであった。それ故に充分確実なより大きい財富からその費用は出るのであった。老人に対してもまた真実の子供がその両親を遇すると同じように尊敬を払われ、面倒が見られるのであった。多くの人々の真心から生い先き短い老人達は手厚く遇されるのであった。以上のようなのがギリシア語の[術学](#)の影響から離れた一つの哲理によって生れた道德の競技者達であった。この哲学こそはその入門者に見上げた行為を自ら実行させる。この哲学によって決して捉われない自由が確立される。我々はここにこそ、その証拠を見た。権力者で種々の場合国に君臨したものの数は多い。各々の性質とその執政の形式は違う。あるものは野蛮とも思われる程度に野獣狩に兇暴性を發揮して興味を覚える。これらはあらゆる残忍なことを行う。大量に臣民を生きたままで料理人のように四肢をばらばらに切断して虐殺する。民事を検問する裁判官がまた同様な災厄を持ち込んで人民に臨み、その手を休めない。平静

な穏かな語を仮面として被っているが、含むところの性質は隠し切れない。彼らの後には各都市を通じて彼の不虔と非道の記念碑として、その犠牲者の忘れ難い惨禍が残る。しかし、これらの極端に兇悪なるもの、また、深く反逆心に染った偽善者もここに記したこのエッセネ、即ち聖い人々の集団に対してはいいがかりもつけることはできなかった。これらの人々の高く優れているには抗し難いものがあつた。彼らは皆自制のできる生れながらの自由人として遇しその共同食と口にいけない友情感を賞揚した。これこそ完全に優れた幸福な生活の最も明瞭な証拠であつた。なお、エッセネの間には幼児も少年も青年もなく成年者および既に老境に達した人達のみで肉慾煩惱に悩まされない。また情慾に駆られることのない誠実な絶対の自由の境地に入つた人々によって成っていた。彼らの自由の試練はその生活である。彼らの中一人もおよそ私物と名のつくもの、家屋であれ、奴隷であれ領地であれ、家畜であれ、財産となる機具、設備品は一切私有を許されない。彼らは私有財産を投げ出して皆の共同資産に投じた。彼らは同じ様式の共同生活をなし共同食事をして絶えず共同の安寧幸福のために勤労した。団員各々異なる仕事に従事し、競うように各々倦まず熱情を持って業務に励み、熱したと思うと冷めるなどということなく、寒暑別なく骨惜しみしないで働いた。彼らは日の出前に仕事に従事し日没に至って漸ぐ止めた。彼らの中のある者は農耕者で熟練しており、他の者は牧畜者で家畜を飼育した。また、ある者は養蜂者であつた。更らに手工業の名工もいた。生産されたものは規定によって選んだ管理人に渡した。管理人はこれを受けて、必要品を購入し、共同の生活をし、共同食をとり満足した。彼らは共同食ばかりでなく一様の粗末な白衣を用いた。一人に属するものはまた全体に属すと考えられ、全体に属するものは各自のものであると考えられていた。彼らの中誰か病気に罹れば、共同貯蔵の中から薬が支給された。全体の看護と関心を持って世話され、あたかも沢山の子供を持っているようであつたばかりでなく、しかも良い子供に恵まれているようであつた。

フィロンの伝えるところでは、彼らは結婚を排し禁慾生活を守ったといっている。ヨセフスは、彼らは結婚生活を軽視しているが、他人の子供を養い勉学させたといっている。また、教団内で結婚生活を営んでいたものもあるような記述もある。

彼らは敬虔で、日の出前に卑俗の事柄については絶対に語ることなく、祈を唱える恰好も太陽の昇るのを祈願するようであった。この派に入門を許されるには、1ケ年間彼らと同じ生活様式で過ごすよう規定されていた。小さい斧と白衣と腰紐が与えられる。この期間禁慾が守られるという証明がついた時、水の潔斎を一緒にするように仲間に加えられた。しかし、まだ仲間との同居生活は許されない。意志堅固なることが示され、なお2年間その気性が試され、入門の資格ありということになれば入門が初めて許された。そして、共同食に触れる前におびたしい「誓い」をなさなくてはならなかった。即ち、神に敬虔であること、人に正しいこと、他人の命令であっても人に害を与えないこと、常に悪を憎み正しいことに味方し、全ての人に真実を示し、特に権威あるものに忠節を尽すこと、およそ神の助けなくしては支配権を獲るものはないからである。しかし、この権威を冒瀆しないこと、久遠に真理を愛するものであること、偽りを語るものを進んで非難し、盗をしないこと、心の中でも不合法の利益を考えないこと、自分の属する派のものには何事も隠さないと同時に、その教理の中の何事も他には生命を堵してどんなに脅嚇されても漏らさないこと、その上にその教理をかれ自信授けられたという以外には何人にも伝えないと誓うこと。そして、彼らの派に属する書物を保存し、天使の名を守護するなどが新入門者の誓うことであった。

彼らはモーゼの律法を厳守した。ローマ軍との戦において、彼らは捕えられて拷問され律法者を冒瀆する言を吐くように強いられまた、彼らに禁じられた食物を食するように強いられても、一人として拷問人を呪う語を発したり、涙を流すものはなかった。彼らは苦痛の中に微笑を漏らし、復活を期待して息を引きとったという。ヨセフスの『ユダヤ戦争記』にはエッセネのヨハネが指導者の一人と記され、また、

エッセネのヨナタンはティムナ地区の指導者に選ばれ、ルッドやジャッファやエマウスもエッセネの指導下に入ったと記述してあるが、エッセネの教義は**絶対非戦主義**であったから、このヨハネもヨナタンもエッセネの精神をユダヤ革命のため棄てたのであって、最早エッセネではなくなるとさえクラウスナー教授はいつているがこ、の見解には直ちに肯じ難いところがある。

② ゼーロータイの起源と滅亡

ゼーロータイは宗派の一つであってパリサイ派のような平和論者ではなかった。また、サドカイ派のように祭司で政治にたずさわった宗派ではなかった。また、エッセネ派のような敬虔な隠遁者でもなかった。ゼーロータイは熱狂者で徒党を組んで全てのイスラエルの敵、ヤハウエの選民を苦しめて、ヤハウエを冒瀆するものの撲滅を期したものであった。

ゼーロータイはシリア総督キリニウスのユダヤ人口調査に際してガリラヤの**ユダス**一味がローマへの反抗の火蓋を切った時から呼ばれ始めた名であるが、ゼーロータイの起源はもっと古くユダヤ教に基礎を置いていた。紀元前 166 年の**マカベアの反乱**は 2 つの動機から起きた。即ち、その守るユダヤ教の象徴としての法典トーラの守護とシリア帝国の**羈絆**を脱してユダヤの自由解放を獲得するにあった。マカベアのシリア帝国への反抗の意義は永く記憶された。トーラはユダヤ教各派において国民宗教の象徴として自覚されていた。ゼーロータイはヤハウエは唯一の法的神であって他は悉く偶像に過ぎないと観、今やこの神の權威は異邦によって冒され、その選民を迫害するに至っては愈々黙してはいられないということになった。マカベア以来 100 年反抗は表面に出なかったが、この思想は漸次民衆の中に発達した。ヘロデ王がマカベア王家を覆がえす気配の見えるに至って、俄然トーラに対する狂的守護の熱心が燃え始めた。ヘロデ王が死刑に処したヘゼ

キア某をヨセフスは匪賊の頭領と記したが、このヘゼキア某こそはゼーロータイの先駆者ともいふべき人物であった。ガリラヤで反乱を起こしたユダスは、このヘゼキア某の息子であった。亡父の播いた種は、既に相当の地盤に根を降ろしていた。ヘロデ王の弾圧、ローマ代官のローマの政策強行は、トーラ擁護の決意を同志に堅めさせた。妥協を重ねて保身に汲々たるもの、トーラ擁護の熱心を欠くものはユダヤ人非ユダヤ人を問わないで攻撃を加えた。大規模な攻勢に出られない間は、専らこれらに暗殺と掠奪を以て報いた。ユダスは、ローマに対する憎悪を子のシメオン、ヤコブ、メナヘムに伝えた。ユダスの孫エリアザルは、マサダ要塞陥落までローマに反抗したのであった。ユダヤ戦争は終始ゼーロータイの戦であったが、何れの宗派のものも多少はこの戦に関係した。[ウェスパシアヌス](#)の後ゼーロータイの名は消えているが、[ハドリアヌス](#)帝の時代のユダヤ叛乱も、ゼーロータイの熱心の燃えたものでローマによる割礼の禁止、エルサレムに異教の神殿の建立されるのを危惧して、トーラ擁護のために敢然ローマに戦を挑んだのであった。敬虔な[ラビ・アキバ](#)でさえ、バルコクバを誤ってメシアと認めた（民数記 24 章 17 節の言う「星の子」）のであった。ゼーロータイは、暴力によってイスラエルの目的を達成せんとして2回とも惨敗した。マカビアの成功からユダヤ人は、トーラを一層敬ったのであって、ユダヤ教は各派とも皆トーラを基礎としている。特にパリサイは、精密極まるトーラ解釈法さえ編み出したのであった。パリサイは平和主義で暴力を否定していた。パリサイは宗派としてはゼーロータイに合体しなかった。ローマがユダヤに干渉してから120年、ユダヤはローマの覇権の下にあった。ローマはネロ帝に至って栄華もその頂点を下り、西方ゴール、ゲルマンに東方パルシアに、その威も漸く揺ぎ始めたかのように思われた。ユダヤ教に改宗するものが西方にも東方にも現われ、アディアブネの女王ヘレナを初め、その王子イサデスはユダヤ教に帰依してエルサレムに邸を営んでいた。バビロンではユダヤ人は自治を獲得していた。当時のユダヤ人の多くは、イスラエルの崇められる日も近い、神の選民がローマの圧政下に永久におかれる理由がないと信じた。パリサイ律法学者のあるもののように、ヘ

レニズム化して非ユダヤ的の傾向を帯びるか、エッセネのように隠遁して静かに思いに浸っているかしては、ユダヤ民衆からは離れるばかりであった。

神の力が天から顕現して、神意に叶わぬものは破壊され、イスラエルは外敵から救われ新天地が創造される。ユダヤ人を首位に神の国が実現する、というのは民衆の喜ぶ信仰であったであろう。かの終末的予言は、民衆の熱烈な願の表現であった。そして、メシア出現の遅いのに焦燥を感じた狂信徒ゼーロータイは、**武力だけが終末的予言を実現する手段であり、メシア自身も武力を用いて異邦人を征服し、救を成就するに至ると信じたのである。**このゼーロータイを盗財団が利用して、ゼーロータイの信条さえぬすめたので、時には盗財団とゼーロータイは一心同体であるような観を呈しさえした。ゼーロータイ内に隠れて、盗財団は富裕階級を掠奪し、私腹を肥やし、しかも巧みに民衆の共感と同情を得た。ゼーロータイの前衛シカリ暗殺団の行動は、ユダヤ革命運動であったか、強盗殺人であったか、あきらかでない。はじめの頃は、相手も主義主張を異にする政敵に限定していた。大祭司も神殿においてシカリ暗殺団に殺され、そのほか親ローマ派のものの暗殺される者多く、時には代官が除こうと窺うユダヤ貴族の暗殺にさえ利用された。民衆はゼーロータイに好意を持っていた。当時富裕階級と、一般民衆との社会的経済的の懸隔は甚しくなっていた。祭司階級は富裕となって墮落し、民心を離れていた。ローマ代官は民衆の心情を洞察できないで、外に現われた行動をみて秩序維持に名をかりて民衆を圧迫し、他面盛んに収賄し民衆を激昂させた。民衆は、ゼーロータイを革命運動の指導者として仰ぐに至った。民衆の動いたのは反ローマのためばかりでなく、寧ろユダヤ内部の種々な内訌軋轢のためではなかったかと思われる。ゼーロータイの革命運動は、無産民衆を加えて勢力を増したが、エルサレムにおいて[アグリッパ1世](#)の邸を焼き富裕者祭司を襲撃し、その邸に放火したが、その標榜した反ローマ帝国ユダヤ革命は奈辺にその精神を見出すか困難である。ゼーロータイに潜入した過激派が指導的地位に登り、盛んに活躍して民衆を煽

動し、社会変革を画しているのがわかる。ヘレニズム反対の思想運動、ローマ帝国主義への抗争としてだけでは解し難いものがある。そして、遂にゼーロータイはエルサレムを占領した。サドカイ派はじめ、有産階級の大部分のものはエルサレムから逃亡した。残る一部は、大勢の赴くところ革命派に加わった。パリサイ派はゼーロータイおよび無産者の衆合には参加しなかったが、その地位を利用して革命には一時的にせよ成功した。一般大衆はパリサイ派を支持していた。ゼーロータイ内の革命分子は、パリサイのユダヤ的であるのに信頼してその革命政府組織にその功をなさせ、ゼーロータイから一人の革命委員も出さなかった。寧ろ、ゼーロータイ内の過激分子の策動を封じて、サンヘドリンに十分な力を振寄せたので、過激分子も大衆の動向を観察して沈黙した。過激派は貴族的革命の虚を突く機会を覗いたとも思われた。ガリラヤにおける失敗は、パリサイ派に致命的なものがあつた。そして、エルサレムにあつたゼーロータイの首領の一人で、貴族でもあつた祭司家のエリアザルは、この部下とともに良くゼーロータイの真精神を体得して民衆を指導した。しかし、ガリラヤからゼーロータイの首領[ギスカラのヨハネ](#)がエルサレムに入ってから、形勢は俄然変つた。即ち、ゼーロータイはパリサイ派と別れて互に衝突した。一般民衆はパリサイ派に加担し、ヨハネ派は漸次圧迫されるようになって、エルサレムに集つた民衆と関係のないイデューミアの同志をエルサレムに引き入れて、その援助でパリサイ派を破つた。ゼーロータイの過激派の策動であつて、エルサレムはゼーロータイの手に歸した。しかし、ゼーロータイの最後の目的は神裁政治の実現であつて、これがため武器を執り、それがためにヤハウエを蔑す富裕階級および私慾を計る祭司を[膺懲](#)したのであつた。武力は手段であつて目的ではなかつた。ゼーロータイ内に巢喰う過激派が、このゼーロータイの信仰に満足するわけがない。第2段の策動に移つた。乃ち、過激派中の最左翼シモン・ベンギオラ派を巧みにエルサレムに迎え入れることに成功した。反ローマ帝国というユダヤ革命の精神は消えて、過激派はエルサレムの山手・下町両地域を掌中のものとし、掠奪暴行の限りを尽した。ヨハネは神段に拠り、エリアザルも神殿の内陣に拠つた。何れもロー

マ軍に対してであった。そして、ヨハネ派は、過激派に蚕食されていた。エリアザル派と協調してローマ軍に当ろうとしないで、エリアザル派に挑戦してエリアザルに従う祭司らを殺害した。エリアザル派の拠る神殿内の根拠を突いたので同派は全滅した。ローマ軍がティチウスの下にエルサレムに迫った時、シモン・ベンギオラ派とヨハネ派は協同したが、ヨハネ派中のゼーロータイは粛清され、全く過激派だけとなった。ヨハネはその名を首領として挙げてはいたが、シモンの指導に従わねばならなかった。民衆は訴えるところなく過激派に苦しめられて、後ローマ軍に殺害され、或は捕虜とされたのであった。この過激派は無産階級を母体として当時の支配階級と抗争したが、なんら指導原理を有していたものではなかった。過激派に加わった無産者は、労働を忌み労働を為さずに富裕者の享楽にあずかることを望んだのであって、富裕者を掠奪することを以てその目的を達しようとしたのであった。(エルサレム攻囲戦)

エルサレムの落城ユダヤの没落は、ゼーロータイの狂信、祭司の墮落、ローマ代官の失政富裕階級の利己的奢侈等の原因はあろう、しかし、ユダヤ人の生活に蕩々として浸透した商業主義の矯修は階級の対立を生じ、無産階級を自暴自棄にならせるほかなかった。ユダヤ民衆はローマの無敵の権力に効果のない抵抗を試みるか或は過激派に走るか、何れにしても静止する事はできなかった。過激派はエルサレム落城と同時に、僅かのゼーロータイとともに亡びた。マサダ要塞におけるシカリ団の自殺は、ユダヤ過激派の最後であった。しかし、このゼーロータイの伝統は、現在のイスラエルに脈々として続いているようである。イスラエル国軍の中堅は建国前からあったハガナ、シュテルン、イルグン団であって、実にマカビアのユダヤ復興の独立戦争の指導精神、反ローマユダヤ戦争におけるゼーロータイの精神が連綿として続いて来ているのをみるのであって、今日のイスラエルの行動を観察するにはゼーロータイを忘れてはならない。

③ ユダヤ人のメシア思想

パレスチナのユダヤ民衆はローマを憎悪した。この憎悪はローマの統治そのものであったが、ユダヤの宗教もローマを憎悪する因由となっていた。ユダヤ人はローマが聖地をけがし、しかもヤハウェの選民の上に君臨しているということには、堪えがたい宗教感情を持っていた。それゆえに聖地から異教徒の冒瀆者を、機会あれば掃蕩して潔めようとしたのであった。遂に、ローマに対して乱を起こしたが功なく、解放は人工の手段や自然の成行によってなるものではなく、超自然の手段によってのみ遂げられるものとの信仰が強まった。ユダヤ人の「メシアの時代」とは、メシアの支配が行われる時代をいうのであって、ユートピア的平和と正義の行われる時代が出現するというのであって、ユダヤ人は一日も速くこの時代の到来することを祈念した。勿論、「メシア時代」の内容は各時代によって異なっていた。メシアとは油注がれたものの意で、ギリシア語に訳されてキリストとなった。ローマの支配からいずれは救い出されるとの信仰は、ユダヤ人がヤハウェの選んだ民族であるという信念に基いていた。ヤハウェはユダヤ人を世界中の民族から特に選び、これと契約を結んだと信じた。イスラエルは異教の不浄物から遠ざかり、ヤハウェに不拔の信仰を持して動じないものとして、イスラエルには輝かしい将来が約束されていると信じていた。エルサレムを中心としてメシア王国が轄然として展開する。この信仰がユダヤ民衆の心を支配した。メシアの統治の時代が切迫しているとの信仰の形跡は、新約聖書の中にも発見せられる。ゼーロータイの多くのものは「メシア時代」を待ちに待って、最早待ちきれなくなって、ヤハウェは選民が自らを救うために勇敢に奮闘するのを照覧あって、「メシア時代」の出現を早められるであろうと確信して武器を執ったのであった。「メシア時代」に最も重要なユダヤ思想の一つは、聖書によってもラビの説によっても、イスラエルの人々が「イスラエルの土地」にかえるという信仰であった（イザヤ書 11 章 11 節～12 節）。一般に平和で国は安泰正義が行われること、田園生活の調和と繁栄等で国の政治には天からの干渉が行われて政

治的のあがないがある。これは、「メシア時代」の礎石と考えられた（ナホム書1章1節～15節）（エレミア書3章17節～18節）。国はダビテの末によって再建され、黄金時代が訪れて恵と正義と豊作の時代が来る（アモス書9章1節～15節）。黙示文書によれば、「メシア時代」にはメシアがイスラエルをローマから解放し、最後の審判までこの時代が続くことを述べている。特にエノク書は、最後の審判の後メシアによって新エルサレムが建設されると記して終末思想を展開している。世界の平和と人類同胞感を懐く恵沢の時代が「メシア時代」の基調であった。

④ エッセネのゼーロータイとの合体の謎

「メシア時代」の思想は、イスラエル史上1世紀および2世紀において重要な地位を占めている。紀元6年ユダヤ国守アケラオがしりぞけられてユダヤはローマ代官に支配されたが、ユダヤの熱狂した愛国者たちはローマの統治をメシア出現の前兆とみなし、ゼーロータイはヤハウエによる王国出現の間もないことを予想した。西暦66年から70年に至るユダヤ革命の時期に、ユダヤのナショナリストの思想および実践の強化に力を与えたのはメシア出現が近いとの信仰であった。エルサレムの神殿の喪失後は、メシア出現が近いとの信仰が一般ユダヤ大衆を励ましたのであった。西暦114年～115年、キュレネのユダヤ人がローマに逆ったのも、メソポタミアのユダヤ人がローマ軍の旗色が一時悪いのをみて解放の間近いのを錯覚して動いたのも、「メシア時代」が近いのを予想したと思われる。西暦132年から3年半も続いたバルコクバの反乱も教法師アキバの支援さえ得たが、これはメシア出現の信仰に酔ったためであった。ユダヤのメシア思想の中に、2つの思想が互に混じり合っていた。即ち、**政治的・国家的の救済と宗教的・精神的のあがないの思想**が錯綜していた。メシアは王であり、あがないの主であって、イスラエルの敵を蹂躪してイスラエル王国を建て神殿を復興する。同時に、「神の国」を通じてこの世界の改善を計

り、偶像を撲滅し、唯一の神のあることを宣言して罪をなくす。要するに、メシアは政治的な**英傑**であると同時に精神的な英雄でもあるとされた。民衆の間であって民衆の心を知っていた教法師達は、メシアへの期待を煽ったと思われる。「エノク書」「[ソロモンの歌](#)」「[モーセの昇天](#)」「[第4エズラ書](#)」「[バルク書](#)」などは、何れも民衆の友をもって任じていた教法師達の作であった。ゼーロータイの蜂起は、高位の教法学者**ヒレル派**の賛するところではなかった。ヒレル派は自由のための戦いといっても、ユダヤの完全独立が護られるのを疑っていた。ヒレル派は律法の研鑽に比較すれば、政治問題は微々たる意義しかないとし、当時民衆の間に流布し信仰となっていたメシアによるイスラエルの完全独立、「神の国」の出現などは夢幻と考えていた。ローマ軍のエルサレム包囲中、ヒレル派の教法師[ヨハナン・ベンザカイ](#)は律法護持のため避難して城外に出た。これは自由を求める心がなかったためではなく、律法を護持することによってイスラエルは最後には自由が護られると確信してエルサレムを後にしたのであった。実際にユダヤ戦争が終って残ったのは律法であって、神殿を中心としたエルサレムの光栄は物質的に何も残らなかった。ユダヤ民衆はエルサレム陥落という災厄に会って、ユダヤはメシアによってのみ国民が復興することを期待し、メシア思想を一段と飛躍させた。エッセネの脱世間の生活も、ゼーロータイの過激行動も、このメシア出現の待望と信仰から来ているのであって、エッセネのゼーロータイとの合体の謎もここにあるように思われる。